

愛宕山



虎ノ門

資料作成
H.TASHIRO



【上図: マピオン 下図: 安政6年(1859-1860年)作成の江戸大絵図から引用】



1) 光明寺 江戸の三大大火(目黒行人坂の大火=明和の大火) 4ページ参照

2) 天徳寺 天徳寺は、江戸浄土宗四ヶ寺【誓願寺(浅草)、天徳寺、本誓寺(深川)、西福寺(蔵前)】の一つとして寺格も高く、江戸時代は愛宕山西側一帯を寺域とするほどの大きな寺院であった。創建は天文2年(1533)、江戸城内紅葉山にあったが、後に江戸城拡張のため、現在地に移転したと言われている。

【昭和新撰 江戸観音霊場33選第20番札所】門前の左側には「西之窪観音」と刻まれた石標が建っている。最初の札所(発願)は浅草 浅草寺、最後の札所(結願)は目黒の瀧泉寺(目黒不動)。

天徳寺は、元和3年、明和3年、安永元年、嘉永3年、明治8年、大正12年の関東大震災と何度も火災にあっていて、本堂がどこなのか分かりにくい。左奥の写真のように八角形の形をした建物ががあるが、それが本堂。その手前の鐘楼に吊られた梵鐘は古く、寛永12年(1635)に鑄造された梵鐘で、23区内に現存する梵鐘としては最古のものだそうだ。

3) 愛宕山 NHK の前身、社団法人東京放送局(JOAK)は、この愛宕山に放送局を置き、1925年7月から1938年のNHK 東京放送会館移行まで、ここから発信された。

愛宕山は自然にできた山としては23区内で最高峰。愛宕神社境内には、三等三角点があり、25.7m の標高が記録されている。

愛宕神社正面に上る急な階段は「出世の石段」と呼ばれているが、これは寛永11年1月28日(1634年2月25日)、父徳川秀忠の3回忌で増上寺に赴いた家光の随行で四国高松藩家臣「曲垣平九郎」が、馬で石段を駆け上がって山上の梅の枝を取ってくることに成功し「馬術の名人」と称えられた、という逸話から来ている。

大正14年(1925年)11月8日にも成功例があるが、その様子は東京放送局によって日本初の生中継がされた。

4) 真福寺 慶長10年(1605年)徳川家康から愛宕山下に1360坪の土地を与えられて開設。江戸末期、オランダ、ロシア、フランスなど外国からの使節団が訪れた際には、江戸城に一番近い寺として宿所に当てられた。

家康が信仰した「勝軍地蔵菩薩」が愛宕神社の本地仏として別当寺の円福寺に祀られていたが、明治の廃仏毀釈により円福寺が廃寺になると、これは近くの真福寺に移された。関東大震災で焼失してしまったが、1934年、銅製で復元され、1997年に建設された真福寺・愛宕東洋ビル一階外側に祀られている。

【余談】愛宕神社の祭神、火産霊命【ほのむすびのみこと=京都愛宕山の軻遇突智(かぐつち)】は火を掌り、火伏せに霊験のある神であるが、本地仏の勝軍地蔵菩薩が火災で焼失してしまったのは皮肉な話。

5) 虎ノ門ヒルズ 地下を都道環状2号道路が貫通する地上52階・地下5階建て、高さ247m の超高層ビル。

2014年6月11日開業。都内では東京ミッドタウン・タワー(248m)に次ぎ2番目に高い建物とされているが、アンテナなどを含めた最も高い部分では255.5m となり、都内で最も高いビル。

ビルの下都道環状2号道路は、2020年の東京オリンピック開催時には選手村と競技場を結ぶ大動脈となる。周辺の再開発はさらに進められ、2020年までにこのビル近くに地下鉄日比谷線の新駅が開業する予定。

現在、NHKで放映中の大河ドラマ「真田丸」の真田家下屋敷はこのビルの敷地の一部となっている。

これから見に行く虎ノ門の外堀石垣築城の一部分を担当した佐伯藩毛利家の上屋敷もこの近くにある。さらにその東には浅野内匠頭終焉の地となった一関藩田村家の屋敷もある。

6) 金刀比羅宮 万治3年(1660年)に讃岐国丸亀藩主であった京極高和が、その藩領内である象頭山に鎮座する、金刀比羅宮(本宮)の御分霊を当時藩邸があった芝・三田の地に勧請し、延宝7年(1679年)、京極高豊の代に現在の虎ノ門(江戸城の裏鬼門にあたる)に遷座。以後、江戸市民の要請に応え、毎月十日には邸内を開き、参拝を許可した。海上守護・大漁満足、五穀豊穰・殖産興業・招福除災の神として広く庶民に尊信された。「虎ノ門金刀比羅宮」の御神紋は、丸に金の印。仕事運と金運アップのご利益があると伝えられる。

境内の銅鳥居は文政4年(1821年)に奉納された明神型鳥居で、左右の柱上部には四神の彫刻が施されており大変珍しいもの。四神とは四方の守護神であり、東は青龍、西は白虎、南は朱雀、北は玄武が守る霊鳥霊獣。虎ノ門を描いた絵の中にもこの鳥居が描かれている【港区指定有形文化財・建造物】。(金刀比羅宮 HP から引用)



7) 櫓台跡 8)江戸城外堀跡



外堀通りをまたぐ歩道橋の下に隠れるようにある櫓台跡



かつてはこのような櫓が建って外堀の守りを担っていた



旧教育会館前に残る石垣



歩道上の石垣跡



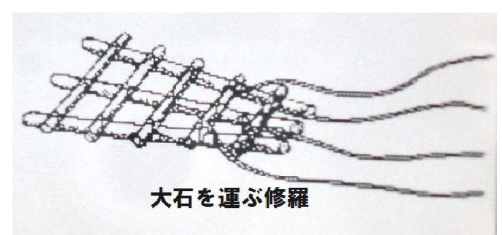
文科省中庭の石垣



九州佐伯藩 毛利家 矢羽根の刻印

江戸の城下町を取り囲む外堀の石垣は、寛永13年(1636年)に、家康の代から続いた江戸城整備の総仕上げとして三代將軍徳川家光が命じたもの。60家の大名を6組に分け、石高によって区域を分担し、現在のほぼ外堀通りに相当する全長14kmを積み上げた。石垣に使われた花崗岩は小田原・伊豆方面から船で運ばれ、陸上では、車、ころ、修羅などで移送した。

【おまけ】修羅とは大きな石などを運ぶためのソリ(図参照)。



大石を運ぶ修羅

大石(たいしゃく) = 帝釈(天)に際限なく戦いを挑み続け、ついには動かしたのが修羅だという故事に由来する。

右の写真は銀座線「虎ノ門」駅の地下通路途中にある、展示室。虎ノ門から溜池までの区間は、岡山藩(池田家)を頭とする組が担当し、この展示室から見る石垣の大部分は佐伯藩毛利家(大分県佐伯市)が築き、右手一部が庭瀬藩戸川家(岡山市庭瀬)が担当した。

切り出した石の所有を明示すると共に、工事担当区分けを示すために石には刻印が彫られることがあり、ここでは毛利家の矢羽根がいくつも目立つ。

文部省の中庭にある石垣は摂津三田藩九鬼家が担当した。



9) 10) 外堀と現在の区境について 地図の北側が千代田区、南側が港区であるが、大通りである現在の外堀通りが区境となっているわけではなく、昔の外堀がその境となっている。古地図で見る堀は 9 の場所でクランク状に曲がっているが、現在の道にもその形跡が見られる。7~8~9 の部分は堀の南側まで千代田区であるが、9~10 の部分は港区に譲った形となっていて、この部分の境界決定にはどのようないきさつがあったのでしょうか。10 は千代田・港・中央区の境のポイントとなっているが、外堀に沿った形で区が仕切られているのが分かる。

江戸では大火が100回余りあり、2～3年に一度は大火に見舞われた。中でも被害の大きさから、「明暦の大火」「目黒行人坂の大火」「丙寅(ひのえとら)の大火」を江戸の三大大火という。

【引用 <http://www.gakken.co.jp/kagakusouken/spread/oedo/06/kaisetsu3.html>】

明暦の大火

明暦3年(1657)、本郷丸山の本妙寺など三ヶ所から出火。大名屋敷500、旗本屋敷770、寺社350、橋60、町屋400町が焼失。江戸の町の大半が焼失し、死者は107000人に及んだといわれる。原因は、同年本妙寺の大施餓鬼に、亡き娘の供養にと燃やした振袖が風に舞い上がって本堂に燃え移ったことから、というエピソードが伝わっていて、別名「振袖火事」と呼ばれる。

この明暦の大火の教訓から、火災の延焼を防御する空間として、火除け空地(盛り場等)や火除け土手、広小路(道路幅10間=約18m)などを設置した。また、各地に掘割りを造って消火用、避難用にした。



目黒行人坂の大火

明和9年(1772)、目黒行人坂の大円寺から出火。原因は生臭坊主真秀が盗みのために寺の庫裡に放火したもので、被害は焼失町数934町、死者14700人と伝えられている。真秀はその後捕らえられ、火あぶりの刑に処せられた。また、この火災による大被害で物価が高騰、幕府は厄災を払うため同年冬に年号を安永と改めて、平穏な世の中を願った。

右は光明寺境内にある「明和の大火死者供養墓」の説明板。

【港区指定文化財】

ここでも、境内に避難した男女90人が焼死したと書かれている。

丙寅の大火

文化3年(1806)、芝高輪の車町から出火。原因は不明。諸候藩邸83、寺院60、神社20余ヶ所、530余町が焼失した。焼死溺死者1200余人と伝えられている。

文化財を大切にしましょう

平成二十二年十月二十七日

港区教育委員会

港区指定文化財

旧跡 明和の大火死者供養墓

明和九年(一七七二)二月二十九日の午後、目黒行人坂の大円寺より出火した火事は、強い西南の風に勢いを増し、麻布・芝から江戸城郭内・京橋・日本橋・神田・本郷・下谷・浅草などに延焼、千住まで達して、翌晦日の午後によく鎮火しました。いわゆる「目黒行人坂火事」で、明暦三年(一六五七)一月十八日の「振袖火事」以来の江戸の大火であったといわれています。この火事で類焼した大名屋敷は一六九、町数は九三四、橋は一七〇、寺は三八二にのぼったと記録にあります。死者は一万四七〇〇人、ほかに行方不明者も四〇〇〇人を超えています。

光明寺の過去帳によれば、境内の山の上に避難した男女九十人が焼死し、寺の本堂・勝手・諸堂も残らず焼失したとあります。この供養墓は、この惨事に心を痛めた当時の住職が、焼死者の供養のために建立したものです。のちに墓は山の上から現在地に移されましたが、火災による惨事を現在まで記憶にとどめるものとして貴重です。